所信表明

二〇二四年度学園振興委員長選挙所信表明

学園振興委員長候補
文学部　三回生
瀧口　夏寧

この度2024年度学園振興委員長に立候補いたしました、文学部3回生の瀧口夏寧と申します。正課では香川県高松市屋島山上の観光地形成についての研究、趣味としては47都道府県の観光地巡りを、日々楽しみながら取り組んでおります。

本所信表明では、これまでの振り返りと、私の考える2024年度学園振興委員会の在り方・活動方針の2点について述べていきます。

【これまでの振り返り】

私は2回生に学園振興委員として中央パートに入り、3回生では学園振興委員長補佐として、2年間学園振興委員会に所属しました。その際に、自分たち学生が直接、大学側に想いを届

けることができるということに対して、大きな驚きと魅力を感じました。

特に2回生の秋には、全学協議会が開催され、学生が教学や学生生活を始めとした大学づくりに関する議論に参画することが確認されました。そして、3回生の春には、私たち学園振興委員会の根幹となる取り組みであった「要求実現運動」は「学園共創活動」と名前を変え、大学と共に現在だけでなく未来の学生のための学園を創りあげていくという議論のベースが決まりました。

このような活動に直接的に関わることができたことによって、私の中の学友会の魅力は年々増加してきました。

以下、私の具体的な活動の振り返りを年度ごとに行います。

2回生の際には、過年度の議論内容を各部懇談会の議事録や、RS、確認文書から確認し、学友会が過去に行った要求と、それに対する議論経過を勉強しました。その際、学友会が学生の抱える課題解決に向けてどのような取り組みを行ったのか、またどのような課題が未だに残っているのかについて明らかとなったことで、私は解決に向けての活動を積極的に行いたいと思うようになりました。そして、過年度の議論経過から得た知識を

活かし、全学アンケート作成に向けての活動を行いました。学生の抱える課題を受け止めるために、何度も勉強会と議論を重ね全学アンケートを作成し、さらに配布後も学生の想いを文面だけでなく、背景まで汲み取るためにKHcoderを、より詳細な分析を行うためにSPSSといったこれまで使われてこなかった新たな分析ツールの勉強も行いました。その結果、学生の抱える課題の傾向をとらえた分析を行うことができ、課題を背景から把握することができたと感じております。

3回生の際には、2回生での経験を活かし、全学協議会の際にR2030にむけた議題となった教学のDX化、英語教育と専門科目の架橋、次世代研究大学といった継続議題となる3点、その他にも今年度の新たに発生した大学の考える施策に関する設問を含めた、より詳細なアンケートを作成しました。その結果、2023年度のアンケートは、2022年度との経年比較が可能となりました。しかし一方で、一部アンケート結果に変化がみえなかった点から、この1年間では解決に至らなかった課題が多く残っているということも同時に痛感しました。

取り組みとしてはさらに、全学自治会と共に各学部自治会と連携した課題解決に向け、五者懇談会の内容相談会や、報告会を

開催しました。その際には、五者懇談会では解決に導くことが難しい内容や、全学的に扱うべき内容をくみ上げました。これらの取り組みを行った結果、学園振興委員会の全学アンケートを活かした全学的な課題と、各学部自治会からの課題の２点を掛け合わせた論点を提起し、現在は教学部や学生部との懇談会を開催しております。

中央パートに入会してからの２年間、学園振興委員会において、私は以上のような活動をおこなって参りました。

【来年度の在り方・活動方針】

以上のような取り組みにより、2021年度に６年ぶりに復活した学園振興委員会は活動の基盤が確立されたと考えます。だからこそ、2024年度はそれを活かし、今後の活動のひとつの参考例となる年度にしたいと考えております。

具体的な活動方針としては、懇談会の実施に向けて、①学部自治会との連携の継続、②2年間の全学アンケートで扱えなかった内容の確認の２点を行います。

私はこれまでの活動で、学生の抱える課題解決に向けた取り組

みは行えたものの、実際に解決され、中央パートにとどまらない多くの学生が抱える課題が解決されているという実感を得ることができるような取り組みはあまり行えなかったと感じます。しかし私は解決されているという実感を得てはじめて「学生生活の改善」、「課題解決」と呼べるのではないかと考えます。この２年間で議論の裏付けとなる資料は十分に揃いました。そのため、その資料を活かし、私たちは学生が抱える課題解決に向けた取り組みとして懇談会を実施する必要があると考えます。以下、さらに具体的な活動内容について述べていきます。

①

学部自治会との連携が必要だと考える理由は、学生との距離が近い組織との連携により、中央パートに属していない学生でも課題解決の実感を得てもらいやすくなると考えるためです。そのため、学生の声を直接的にきける自治会との連携により、さらに詳細な意見を集め、そして全学議論により課題が解決された際には、より近い距離で伝えてもらうことで、学生の生活をより良くしていきたいと考えます。

まず、今年度に引き続き、各学部自治会と連携をとった課題の

確認を全学自治会と共に行います。

学部の議論が全学議論にも活かすことができるということは、今年度の取り組みで改めて明らかとなりました。そのため、現在実施している五者懇談会相談会と報告会を引き続き開催し、相談会の際には、五者懇談会でも全学的な内容について話し合えるような環境を整えるためのサポートを行います。そして報告会での五者懇談会の議論共有を経て、全学議論を進めていきます。

また、新たに自治会単位での過年度の議論内容の共有をお願いすることで、さらなる全学議論案の発展を目指します。

学園振興委員会では全学内容に関しては過年度の議論内容を確認できましたが、各学部自治会のものは確認できていません。そのため、学部自治会との連携の中でその点の知識を深め、全学議論に活かしたいと考えております。

②

次に、2 年間の全学アンケートで取り上げることができなかった課題の解決に向けての取り組みを行います。学生の抱えている課題を少しでも多く解決するためには、集めた学生の声を最

大限に利用した論点の提起を行う必要があります。そして、この取り組みを行うためには、従来の大学側各部との懇談会だけではなく、部を越えた新たな懇談会を開催するべきであると考えるため、実施に向けて尽力します。

「学園共創活動」と名前が変わり、要求事項の可否ではなく、より良い学園創造のための議論を行うようになったからこそ、それを活かして、学生の課題解決に向けた懇談会の設置を積極的に取り組みます。

【最後に】

私は学園振興委員会の在り方が確立されたと感じるこの２年間、一員として活動できたことを誇りに思っています。そして、先輩方が創りあげたこの学園振興委員会で活動してきた自分だからこそ、つくれるものがあるのではないかと考えます。

学生の抱える課題解決という学園振興委員会の目標だけでなく、自分の大学生活に彩りを添えてくれた学園振興委員会への恩返しの気持ちを胸に、来年度の活動を学園振興委員長として取り組みたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

投開票日　二〇二三年一一月二六日

二〇二三年度立命館大学学友会選挙管理委員会

同中央常任委員会